OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴィレーの『エセー』研究に対する一小批判
Author(s)	竹田, 英尚
Citation	Gallia. 1983, 21-22, p. 186-193
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10773
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴィレーの『エセー』研究に対する一小批判

竹　田　英　尚

『エセー』の源泉と進化に関するピェール・ヴィレーの研究は,[1] 周知の，すばらしい大研究である。『エセー』とその素材をなす数多くの作品との関連を精察することによってヴィレーは各章の書かれた年代を推定し，この執筆時期の区分にもとづいて作品様式と思想の進化を明らかにした。彼の考察は，古典古代の作品や十六世紀の文献に関する広大な調査と，『エセー』の精緻な分折との驚嘆すべき綜合である。新しく研究の基盤を確立し，その上に立って，周辺資料と対象作品の両面から広範かつ詳細かつ繊細な追究をおこなったこの大著は，正統な研究の亀鑑であり，モンテーニュ研究のみならず，おそらくフランス文学研究の一つの最高峰を示すものであろう。

しかし，いかに偉大であるとは言え，ヴィレーの論考も，当然のことながら，欠点がないわけではない。その不十分なところを補わんとして批判することは，敬意を欠く行為ではなく，後進の者の務めにすぎないであろう。本稿においては，そのうち最も根本的と思われる点について批判を試みてみよう。

ヴィレーは，一方において広く綿密な資料研究をおこないながら，一方においては，作品様式と思想の進化に対する読書の影響は二次的な原因であり，より重要なのは天性と実人生の体験であると考え,[2] その現われを作品の中に感じとり，読みとろうとした。この姿勢によってヴィレーは作品を分析する繊細な感覚を保ち続けた。私達は確かに両者の調和に感嘆する。しかしながら，そこには一つの難点がある。それは，作品を書くこと自体によって生まれる進化を考察する視点が不明瞭なことである。『エセー』の著しい特徴である自己描写と，作品名にもなった「エセー」という思考と著作の方法は，最初から明確な制作方針ではなく，モンテーニュが作品を書くにつれて発展したことを思えば，この欠点が瑣末な問題ではないことが察せられよう。ヴィレー自身も述べているように，もしモンテーニュが最初から自己描写の意図をもって書いたのであれば,『エセー』は私達の見ているような独創的な作品様式にはならなかったであろう。あるいは，また，モンテーニュの思索がルソンという伝統的な形式を破ってゆく動きが『エセー』の進化であり，モンテーニュ自身の作品論は，内部にこのような進化が十分に進んだのちの自覚として語られる面が強い。[3] したがって，読書や実人生の体験の影響のほかに，作品を書くこと自体がもたらす成長を把握する視点と分析方法が,『エセー』の研究にはことに必要なのである。そして，彼自身の考え方に反して，それがヴィレーの研究にもっとも欠けている点である。

と言っても，ヴィレーがこのような分析の視点を何らもっていないわけではない。実際，私達がこの小論で批判するどのようなことであれ，彼が一度も触れていないことや，まったく気づいていないことなぞはないと言ってよいだろう。しかしながら，何を重視して，どのように明確な視点を設定するかという相違が，当然，作品の理解と解釈に重要な結果をもたらす。作品の進化を考察する拠り所にならねばならないのにもかかわらず，『エセー』の随想自体を分析するためのヴィレーの視点は十分に明確ではない。たとえば，作品の構成要素として，ヴィレーは，モンテーニュの意見，読書によって集めた実例（以下これを書誌的事例と呼ぶことにする），モンテーニュ個人の経験談，の三つの要素しか考えていない。(4) つまり，最後の要素においては，他者の観察によって書かれた話（以下これを現実例と呼ぶ）と，自己自身に目を向けて書かれた部分（以下これを自己例と呼ぶ）とが区別されていないのである。これら両者の相違を曖昧にしておくことは，経験にもとづく思考や自己描写が重要な問題点である『エセー』を分析する上に，かなり重大な影響を及ぼす。ヴィレーは，ある時には，書誌的事例の中心である，歴史書から集めた実例が，個人の経験を反省し，広げるために果たしたルネッサンス的な効用を認めながら，(5) 初期の『エセー』を評価する立脚点にならねばならないこの認識を，作品の分析に生かしえていない。現実例と自己例を区別していないために，ヴィレーは，没個性的な作品の中でモンテーニュが書誌的事例を手本にして現実例を書き入れながら，まさにこの意義どおり実行していることを，(6) 看過している。あるいは，モンテーニュの思索を支える実例が，書誌的事例から現実例へ，そしてさらに自己例へ発展し，深まってゆく進化の中で，自己描写の起源を考えることを，(7) 忘れている。

思索を支える要素として，書誌的事例と現実例と自己例とを区別し，同時に，いずれも連続した経験の世界として見る見方が明確でないため，ヴィレーは自分自身の作品分析から，十分にふさわしい成果をあげえていないようにさえ思われる。書誌的事例を利用した，様々な作品の作り方を詳細に分析しながらも，ヴィレーは，それらをルソンと共通な二つのタイプに帰して満足する。そして，初期の『エセー』の著作行為は，ルソンと変わらない，非個性的な作業であると断定する。(8) もちろん，ルソンを研究していない私達は，ヴィレーのルソンとの比較について当否を論じることはできない。しかし，ヴィレーが初期の著作の意義を正当に評価していない，と批判することは許されるであろう。初期の章は，構成の観点から他の執筆時期と比較するならば，その種類はもっとも多い。二つのタイプに整理する以前に大切なことは，書誌的事例はただ読書の知識にすぎないのではなく，経験の代替物であることを念頭に置いて，モンテーニュが実例にもとづく経験的な思考法を様々に模索し，試している活動を読みとり，評価することである。(9) その中で，たとえば，「多様性の構成」と呼ぶべきタイプは，(10) 書誌的事例を組み立てるにすぎないような著作も，モンテーニュの個性をひき出す働きがあったことを，もっともよく示しているであろう。その構成は，モンテーニュの人間観や世界観の基本的な性格である多様性と不定性に

根源があり,[11]また，すでに初期に見られる彼の論理や認識論の特徴に通じるものである。[12]

ヴィレーは，書誌的事例のもつルネッサンス的な効用を指摘しながら，初期の『エセー』を評価する時には，書誌的事例が圧倒的な構成要素であるゆえをもって，書物の権威に服従した，まったく非個性的な著作であることのみを強調する。[13] そして，書誌的事例を集める行為をペダンティスムと見なして，進化を考察する。[14] あるいは，ルソンの作者たちとモンテーニュの違いは，より多く判断力を働かせて書誌的事例を組み立てたことであると言いながら,[15] 一方では，初期の『エセー』にはモンテーニュの判断力は何ら関与していないと断じて，中期との相違を論じている。[16] 結局ヴィレーは，ルソンとの比較に注意を奪われて，このような矛盾をおかしたのである。ヴィレー自身が一部で述べていることからしても，書誌的事例の集録にすぎないような著作の内部に，認識と判断の練習の諸方法を読みとることを忘れてはならない。そして，そこで知られたことを，初期の『エセー』の評価に組み入れ，また，初期から中期，さらには後期への進化を考察するなかに生かさなければ，正しい認識は得られないであろう。このような姿勢で研究するならば，初期の『エセー』は，ルソンとの比較や読書の影響とは別に，興味ある事実を示すはずである。たとえば，中期の最初にモンテーニュは，平衡を保った天秤が「私は判断をさし控える」というギリシャ文字に囲まれたメダルを鋳造させたが，従来それは，同時期の「レーモン・スボン弁護」の章の懐疑主義的な思想との関連からのみ説明されて来た。しかし，初期の章の構成にある特徴から，天秤はモンテーニュが人間の思考を表現したイマージュであることを知ることができる。そして，モンテーニュの思考法の観点から進化を捉え直す可能性が開けるのである。[17] あるいは，また，後期の随想の奔放自在で，紆余曲折に満ちた展開についても，その類型はすでに初期の章に存在していることを発見することによって，初期から一貫した進化を把握することができる。読書や事件などの外的な影響を別にして，モンテーニュの思索の成長につれて『エセー』の随想が複雑化してゆく自然な進化を，その内的な理由から理解することができる。[18]

初期の『エセー』にモンテーニュの個性が関与した活動を見ることを好まないヴィレーのもっとも重大な欠点は，初期における「エセー」という意識あるいは思考をきわめて軽視していることであろう。彼が簡単に言及している中にも二つのあやまりがある。[19] まず，ヴィレーは，第一巻第五十章の「エセー」についての表明が初期の終り頃であると認める場合，モンテーニュはようやくこの頃になって自分の判断力を働かせて『エセー』を作り始めたと考える。しかし,その解釈は正しくない。ヴィレー自身の見解でもあるはずだが,[20] モンテーニュが自らの著作について述べる作品論は，作品を書くにつれておのずと生まれた進化を自覚したときに記された性格が強い。また，この章の「エセー」についての説明は，初期の作品の種々な構成のタイプと比較するとき，これらのような著作の意義を弁明しているものとして，実によくあてはまるのである。[21] したがって，ヴィレーが「個性の芽生え」の章の第三節や第四節で論じている,[22] モンテーニュの自由な批判精神や事実に従順

な思考の特性が，第一巻第五十章において，作品を書く方法論の自覚となって現われているのを見なければならない。『エセー』執筆の当初からかどうかは別にして，モンテーニュはこの章と同時期の章のみならず，さらに以前の章においても，「エセー」の姿勢によって書いていたと考えるべきである。

ヴィレーのもう一つのまちがった考え方は，「エセー」とは経験について判断を試すことであり，「エセー」がその十分な意味をもつのはさらにのちのことであると考え，それ以上深く追究しようとしないことである。しかし，「エセー」は経験についての判断の試しであると定義するとしても，「経験」とはただ単に現実の体験のみではない。初期の著作においては，モンテーニュは書誌的事例を現実の世界のものと変わらない実例と見なし，「エセー」の対象とすることによって，経験にもとづく思考を練習したのである。そして，この「エセー」という姿勢が，読書の知識への隷従におちいることを防ぎ，モンテーニュの思索を成長させた功績は大きい。[23] したがって，ヴィレーが，書誌的事例のモザイクのような初期の著作から『エセー』が脱皮できた諸原因の中に，「エセー」という方法的意識を考えていないのは，重大な欠陥であろう。[24]

「エセー」の対象とモンテーニュの考え方の変化を見ることは，作品を書くこと自体がもたらす進化を考察する重要な視点である。ヴィレーは，初期の「エセー」を軽視したために，この視点に思い及ばなかった。「エセー」に言及している箇所の欄外註において，[25] 初期から中期にかけて「エセー」の考え方が，「判断の試し」から「生活の試し」へ変わってゆくという重要な指摘をおこないながら，以後この問題をとり上げることはない。[26] あのような大著で，しかも「モンテーニュの方法」という章も設けながら，[27] 「エセー」の意識とその実践の進化についての論考が一度もないことが，端的にヴィレーの欠点を示しているであろう。

自己描写の考察においても，私達は以上のような「エセー」とのつながりを常に眺めていなければならない。この両者の関連を見ることを怠るならば，自己描写の進化を内面的に捉えることはできない。たとえば，ヴィレーが「実習について」の章について，この章単独でその意義を解釈するのみで，「エセー」の実行による「経験」の質の変化とともに理解するに到っていないのも，この観点を欠いているからである。[28] あるいは，また，ヴィレーが自己描写に対するプリュタルクの影響として述べているようなことは，[29] 書誌的事例を知識として記憶するのではなく，現実の実例として「エセー」することによって十分おこりうる「経験」の質の進化であろう。しかし，私達のこの見解は，もちろん，何らヴィレーの研究の成果を否定するものではない。ただ，このような認識を一方にもつことによって，プリュタルクの影響の評価がより正当になるのではないだろうか。

「エセー」との関連という視点を明確にする時，自己描写のさらに別の側面が明らかになる。それは，自己描写がこの認識的な枠におさまらない性格をもっていることである。つまり，モンテーニュは常に「エセー」の対象である「経験」の一例として自分自身のこ

とを語っているとは限らない。そこには，すでに初期から，作品と自己とのいっそう直接的なむすびつきを求める欲求がからんでいるのである。[30] この性格のみについて言えば，ヴィレーは少しも看過してはいない。「個性の芽生え」の章では，「自己を語る欲求と感性」という節を設けて説明している。[31] しかし，それは，自己描写の進化を考察する明確な視点になり得ていない。それも当然であろう。と言うのは，そのような理解も，「エセー」を見る視点とむすびつかなければ，いくつかの章の特徴についての指摘にとどまり，モンテーニュの思索の成長がルソンに似た形式を破ってゆく全体的な動きを分析することに通じないからである。両者がむすびつかなければ，認識的な反省と自己表現の欲求とがからまりながら，自己描写という様式が，作品を書くこと自体のなかで発展してゆく進化を把握することはできないからである。[32] ヴィレーのこのような欠点を知るのは，「『エセー』における自己」の節を読むのが一番手っ取り早いであろう。[33] 「自伝および伝記文学の影響」，「詩人の影響」，「病気と老いの影響」などについて考察の広がりはあるが，自己描写が『エセー』の主題になる中期を論じているにもかかわらず，「その漸進的な発展の諸理由」についての論究は，いささか貧弱である。

モンテーニュは自己描写についても，『エセー』のなかで自分自身で説明している。もちろん，これらの言葉からも研究しなければならない。しかし，彼の説明は，とくに中期においては，事後の弁解めいて，言葉の意味どおりの理解ではすませられない。あるいは，一様な性格のものではない。したがって，作品分析とつきあわせ，あるいはその上に彼自らの説明の間の差異や矛盾を考えながら，モンテーニュ自身の自己描写論を解釈しなければならない。この点に関するヴィレーの姿勢も十分に明確で，注意深いとは思われない。

ヴィレーは明快にモンテーニュの言葉を整理し，適確に総合して，中期から後期にかけて自己描写の意欲がますます強まることや，[34] モンテーニュの自己描写の考え方に三種類があることなどを説明する。[35] しかし，ヴィレーは，このような基本的な認識からはみ出す言葉に注意を払っていない。そのため，モンテーニュ自身の自己描写論について表面的な解釈にとどまっている。たとえば，モンテーニュは自己描写を弁解するために，『エセー』は家族や友人のための私的なものであって，世間とのかかわりはただ印刷機を借りた以外には何もない，というようなことを言う。ところが，ヴィレーは，この奇妙な言い訳について，モンテーニュの言葉通りには信じられないと述べるだけである。そして，それに比べ，後期には人間研究としての自己描写観に到達したことを示す。[36] しかし，モンテーニュはなぜそのような言い方をするのであろうか。ヴィレーはまったくこの点に考慮を払わない。その理由を考えることは，中期におけるモンテーニュの自己描写に対する意識を理解することに欠かせないはずである。[37] 進化を考察するとき，各時期の間の相違と変化を捉えることを急ぎがちなヴィレーの姿勢が，そこに現われているとも言えよう。

また，ヴィレーは，モンテーニュが一方で人間研究としての自己描写観に到達しながら，一方には，とてもそのような目的で書かれたとは思われない自己描写が存在することを指

摘している。しかしながら，その事実を彼の自己描写の解釈の中で考え直そうとはしない。[38] 当然，人間研究としての自覚に達しながら，この観点からは弁明できないような自己の描き方をするところに，自己描写に対するモンテーニュの欲求を読みとらねばならないのである。同じように，モンテーニュ自身の言葉と『エセー』の分析とをつきあわせながら解釈を深めていたならば，「この仕事の第一の目的と完成は，それがまさしく私自身のものであるということだ。」という言葉について，ヴィレーはそれが誇張であるとか，新しい傾向であるとか考えたりはしなかったであろう。[39] モンテーニュのこの卒直な願望が理解できないために，ヴィレーはただ指摘するだけですませたような自己描写の特徴をも総括しうる解釈ができないのである。このような自己と作品との一致を強調する態度は，何ら新しい傾向ではなく，初期以来一貫している欲求の自然な進化のあらわれにすぎないのである。[40]

ヴィレーの『エセー』研究は，博学で注意深い資料調査とともに，作品に対する精緻な分析と的確な判断とをあわせ持った研究である。全体的に評価すれば，両者の最高度の調和を実現したものであることは疑いがない。しかしながら，その中心はやはり『エセー』の源泉の研究であり，それにもとづく作品研究である。それらに比べれば，作品自体のなかで作品を分析し，進化を考察する研究が，浅く貧弱であることは否めないだろう。[41] そのため，しばしば，ヴィレーの説明に現われるのは，読書から決定的な影響を受けて変化するモンテーニュの姿である。そこには，読書からの影響の選択と受容を決めるモンテーニュの内面の運動が欠如している。この点，さらに深められた研究が期待される。あるいはまた，作品を書くことから生まれる自然な成長に十分に考慮を払っていないため，ヴィレーの進化の説明は，総じて，各時期の間の相違と変化を強調することに傾いている。進化の重要な側面である，同一のものの連続性とその創造的な運動による成長と変貌を描きえていない。

この小論において「エセー」と自己描写の問題に焦点を絞って示したように，ヴィレーの『エセー』研究は批判の余地が少なくない。すばらしい大研究であるが，それは欠点が見あたり難いからではない。私達がそこに見るのは，さらに内的に深められることを待っている，『エセー』研究の可能性の雄大な構図である。本稿における私達の批判が正当であるとしても，私達が補正できるのは，そのほんの一部分にすぎない。批判という行為は，おのずと，相手の過小評価や自己の過大評価をともなう。あるいは，そのような印象を与える。しかし，このような偉大な研究が対象であるときには，実際にはそれは自らの卑小さに耐えぬいて，自己を支えきらんとする行為なのである。

(註)

(1) Pierre Villey, *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne.*

(2) Voir, par exemple, Pierre Villey, *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne, tome second : L'évolution des Essais,* Paris, Librairie Hachette, 1908, p.146.
以後この研究書の参照箇所は,「P.V.p.146」のごとく略記する。

(3) P.V.pp.307－308.

(4) P.V.p.274.

(5) P.V.p.24.

(6) 拙稿「モンテーニュの思索の歩み ―『エセー』の構造とその論理に見る ―（その四）」(天理大学学報第92輯), pp.97－98参照。

(7) 拙稿「その六」(天理大学学報第97輯) pp.116－119参照。

(8) P.V.pp.41－42;p.151.

(9) このいくつかの例として, 拙稿「その四」及び「その五」(天理大学学報第94輯) 参照。

(10) 拙稿「その三」(天理大学学報第90輯) pp.221－224及びpp.232－233参照。

(11) 同上参照。

(12) 前者については拙稿「その三」pp.233－234, 後者については拙稿「その四」pp.98－99参照。

(13) P.V.p.42; pp.51－52; pp.87－89.

(14) P.V.p.126.

(15) P.V.pp.23－24.

(16) P.V.p.155. なお,『エセー』の執筆時期に関する私達の区分は, ヴィレーに倣って, 1580年の初版出版に到る以前の二時期を「初期」,「中期」と呼び, 1588年版刊行のための執筆期を「後期」, いわゆる〔C〕の時期を「晩年」と考えている。

(17) 拙稿「その十」(追手門学院大学文学部紀要第10号) pp.181－183参照。

(18) 拙稿「その十三」(追手門学院大学文学部紀要第13号) pp.332－345参照。

(19) P.V.pp.89－90.

(20) 註(3)の箇所参照。

(21) 拙稿「その七」(追手門学院大学文学部紀要第9号) pp.154－156参照。

(22) P.V.pp.78－87.

(23) 拙稿「その四」pp.93－100, および「その五」pp.76－80, および「その七」pp.156－157参照。

(24) P.V.pp.98－99; pp.149－150.

(25) P.V.p.90(2)

(26) このような視点からの進化の考察の一例については, 拙稿「その十二」(追手門学院大学文学部紀要第12号) pp.207－215参照。

(27) P.V.pp.309－375.

(28) P.V.p.134. 拙稿「その六」pp.116－119参照。

(29) P.V.p.122.

(30) 拙稿「その六」pp.120－127参照。

(31) P.V.pp.73－78.

(32) このような考察の一例としては，拙稿「その十一」(追手門学院大学文学部紀要第11号) pp.252－259，および「その十二」pp.215－224参照。

(33) P.V.pp.133－155.

(34) P.V.pp.237－242.

(35) P.V.pp.260－269.

(36) P.V.pp.266－268.

(37) 拙稿「その十一」pp.256－259参照。

(38) P.V.pp.271－272.

(39) P.V.p.276.

(40) 拙稿「その十六」(追手門学院大学文学部紀要第16号) 参照。

(41) 端的にこの特徴を表わす例として，源泉に頼った分析によって第三巻第六章の随想の展開と章の構成についてまちがった判断をくだし，それにあわせてさらに『エセー』の言葉の解釈をあやまった例をあげることができよう。P.V.pp.285－287；拙稿「その十四」(追手門学院大学文学部紀要第14号) pp.308－313参照。

(M.43　追手門学院大学助教授)